

2017 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50～15:50 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、**HB**の鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

二〇一五年一月三日のパリ襲撃事件とその後のフランスによる「イスラーム国(以下IS)」支配地域への空爆はちょうど二〇〇一年の九・一一事件とその後アメリカ主導の一〇年以上にわたる「テロとの戦争」という流れを再現しているように見える。いずれも痛ましいことではあるが、シリア内戦では死者が約二五万人をも超えるといった問題(米露仏などによる空爆で死者数はさらに増え続けている)が、パリ襲撃事件に巻き込まれた約一三〇人の死の陰に、なぜ追いやられるのか、といった、彼岸しがみと此岸における生の重みにおける非対称性(同時に、報道における非対称性)という意味でも、キシカン(1)ある展開でもある。また「テロとの戦争」が暴力の連鎖を悪化させた結果として、パリ襲撃事件が起きたとすれば、それを受けての武力行使(2)へンチヨウの対応は、憎悪の政治を煽り「最悪事態の更新」という危険性を一層高めているようにもみえる。

九・一一事件以降の「テロとの戦争」に沿って進められてきた過剰なセキュリティ化(安全保障化)が、いかに多くの問題を含んでいるかについては、批判的安全保障研究、批判的テロリズム研究の観点から多くの論者によっても再三にわたって指摘されてきたことである。たとえば、批判的テロリズム研究を牽引してきた国際政治学者のリチャード・ジャクソンは、その著作『テロとの戦争について書く』で、「テロとの戦争」というフレームングに沿ったステレオタイプ化された言説が、敵の悪魔化や(3)化を通じて、予防的また先制的攻撃などの過剰な政治的暴力の行使をもたらし、結果として、一九九〇年代のルワンダやボスニア・ヘルツェゴビナでの内戦と同じような絶対的な敵対関係の構図を作り出すだけでなく、「テロとの戦争」を押し進める欧米諸国の民主主義的基盤(自由・平等という価値とそれを実現しようとする包摂的政治的制度)を掘り崩していると言っている。

政治的暴力の極限的状况としての内戦に近い、現在の泥沼化しているグローバル・ポリティクスの様相は、グローバル内戦化と言ってもよいだろうが、パリ襲撃事件以降、それは新たな局面に入りつつあるかのようにも見える。

そうしたグローバル内戦を構成する武力紛争の多くは国家対非国家主体であるがゆえに、主権国家間の戦争とは全く異なる様

相を見せており、「戦争とは言えない戦争状態」が展開している。九・一一事件を受けてアメリカのブッシュ大統領が言ったのと同様に、パリ襲撃事件を受けてフランスのオランド大統領もまたベルサイユ宮殿に集まった上下両院の議員たちを前に「これは戦争だ」という主旨の発言をし、ISへの事実上の宣戦布告を行った。しかし非国家主体を相手にしている以上、従来の意味での戦争ではない。しかし国境を跨ぐ形で武力行使が行われている。そうした「戦争とは言えない戦争状態」が、グローバル内戦の特徴とも言える。

グローバル内戦化の状況は、まず過剰な安全保障国家化という問題を引き起こした。安全保障と自由とのトレードオフ問題という観点から言えば、スノーデンらによって暴露されたアメリカ国家安全保障局による違法な個人情報収集、そのための監視プログラムPRISMが象徴的に示しているように、国家安全保障が優先されながら人びとの自由が侵されるような事態が深刻化してきている。そこにおける特に際だった特徴は、超法規性、つまり法の宙吊り状態である。過剰な安全保障国家化は、さらに移民・難民のセキュリティゼーションも引き起こしてきた。⁽⁵⁾ それにもかかわらず、というよりは、それゆえにパリ襲撃事件は起きた、という側面があることは否めないであろう。

南北関係の観点からグローバル・ガバナンスのあり方を批判的に考察してきた国際政治学者のマーク・ダフィールドは、保障された生を享受するグローバル・ノース側が、グローバル・サウス側のセイフティ・ネットから落ちた人々に対して封じ込めを行う構図を指して、グローバル内戦と呼んでいる。ダフィールドによれば、「存在レベルにおいて戦われるグローバル内戦では、低開発化された生の流れを封じ込めることが戦略的に極めて重要である」。先に述べたグローバル内戦とは指している事象が異なるものの、両者は深く結びついている。この難民・移民の封じ込めという形態のグローバル内戦は、九・一一以降の「テロとの戦争」という文脈における暴力の拡大・浸透という意味でのグローバル内戦のB面として捉えることもできよう。⁽⁶⁾

「テロとの戦争」を遂行する欧米諸国においては、難民・移民のセキュリティゼーションだけでなく、ムスリム系移民の存在が⁽⁷⁾ ショクバイになる形でイスラームのセキュリティゼーションといった現象も見られるようになった。こうした移民・難民のセキュリティゼーションやイスラームのセキュリティゼーションといった流れは、新しいレイシズムを増幅させることにもなった。

新しいレイシズムとは、古いレイシズムとは異なり必ずしも生物学的差異を根拠としないものの、人間の中には優劣関係があるという前提のもと言語・宗教等の文化的差異を基準として、ある集団を劣位に位置付けることで同等の権利を付与することを拒否するイデオロギーである。レイシズムは、後で詳しく述べるように、他者の非人間化、つまりへ人間／非人間／またはへ人間／（人間以外の）動物といった分節化を持ち込むことで、必然的に、ある集団を非人間的に（動物として）扱うといったことを生じさせる。難民の動物化（動物的扱い）といった問題も、移民・難民のセキュリティゾーンや新しいレイシズムとも連関しながら立ち現れてくることになる。

カッターファイ（カダファイ）政権崩壊後、リビアは内戦状況にあるが、その首都トリポリの動物園に設置された「不法」移民の拘留施設の話は、そうした移民・難民の動物化を象徴するものの一つであろう。

ヒューマニズムの修辞法による「包摂的」排除の政治の矛盾が極限的な形で現れているのが、「人類の名による戦争」であろう。

「人類の名において戦争を行う」ことについての危険性については、すでにカール・シュミットが警告していた通りであるが、そのシュミットの問題提起を、デリダもまた自らの人間—動物政治学の議論に導きながら次のように述べている。

彼（シュミット）による、恐ろしいもの、危惧されるもの、ぞつとされるもの、怖れを引き起こすもの——それは恐怖や怖れによって作用するものです——とは、人道主義的な主張が戦争へと舵を切りつつ、敵を「法外者」「非人間」、つまり獣のように扱うことなのです。つまり、人間、人権、そして人道主義の名のもとに、他の人々を獣として扱うことで、その本人が非人間的で残酷な野獣と化するのです。

すでに、難民・移民らが動物のように扱われているという意味での、人間の動物化が進行していることを指摘したが、そうしたレイシズムに対するルサンティマン、怒りが無差別的な襲撃という形で暴力によって表出されると、レジーム側の指導者たち

は、それに対抗する形で、人類の名において過剰な暴力行使（害獣駆除という形で無差別殺戮^{さつりく}）を行い、その者たちを人狼^{じんろう}に変えてしまう。

しかし、人間の動物化と言っても、もともと人間も動物であることには間違いない。カントでさえ、「市民的な立憲体制においてすら純粹な人間性よりも動物性の方がハツゲンする⁽⁹⁾のが早く、また根っこからしていつそう強力であるから、結局野生の動物を飼い馴^ならして家畜にし人間に役立つようにするには、もっぱら動物性を虚弱にするしかないのである」と述べている。しかし、人間を従順な家畜のようにするというのは、また別の意味での動物化であるし、そこでも「家畜化する者／家畜化される者」という垂直的な権力関係の問題が生じることになる。やはり、人間の動物化の前提となっている「人間／動物」という分節化そのものを問い直す必要があるだろう。そもそも「人間／動物」という分節化は、排他的機制を包含した人間中心主義的世界観の産物である。人間は、なぜ動物に対して生殺与奪の権利を有しているのか、その根拠は、道具的理性を含んだトータルな意味での暴力的優位性ではない。

そうした人間以外に向けられる剥^むき出しの、しかし計算された暴力は時に人間と動物の鬪^いにおかれた者にも向けられることになる。また、そうした暴力が主権的権力の根源でもあるがゆえに、「人間は人間に対して狼になる」というパラドキシカルな契機が用意されることになる。そのようにして、動物に対する人間の主権的暴力は、異質な他者を非人間ないしは動物として扱^あい、動物として扱われた者は野獣として反撃するが、結果として害獣として駆除されることになる。簡潔に言えば、グローバル内戦とは、人間が動物に対して振るわれる主権的権力としての暴力が人間社会の中に逆流ないしは還流してくる現象と言ってもよい。人間の（人間以外の）動物に対する暴力が逆転して自らに降りかかってくることを避けるためには、どうすれば良いか。

そのためには、例えばインド思想で言われるような、特にガンディーが言うようなアヒンサー（不殺生＝慈愛）という非暴力の道に立ち戻るというのも残された選択肢の一つである。権力に対する非暴力的抵抗のみならず暴力に対する抵抗により敵よりも優位に立つことで暴力的主権に血塗られた西洋文明を乗り越えることも可能になる。アヒンサーの原則に沿って非暴力的な世界に組み換えていくという課題が、まさに我々自らに課せられている。その意味では、欧米列強が武力ヘンチョウの「テロと

の戦争」への傾斜を強めている今だからこそ、そうした戦争へサンカクするのではなく、日本国憲法第九条の意義を世界に発信し続けながら、空爆といった無差別殺戮への自制を呼びかけ、非暴力的な手段による対応を求めていくといったことは重要であろう。

アヒンサーは、もちろん人間に対する暴力ではなく人間以外の動物に対する暴力の抑制をも射程に入れている。それは世界内戦化に歯止めをかけるためだけではない。動物や自然に対する人間中心主義的暴力が結果としてガイアという地球生命体を壊し生態的持続性の危機をもたらしている現在、このままでは突入してしまう破局を避けるためでもある。もちろん非暴力を実践することが、いかに人間には成し難い業か、ということは、誰もが知っていることである。ましてや暴力的主権を前提にした人間中心主義的な種差別主義を克服することは至難の業であろう。しかし、例えばバトラーの議論を借用するまでもなく生きとし生ける者は、みな脆弱な存在であり、ケアなどを通じた相互的な絆が必要であるということもまた、誰もが知っていることであろう。そうした「へ人」（人以外の）動物・自然をそして「へ人」人といった相互扶助的な関係主義の側面を見直すことで、ポスト・ヒューマニズムの地平を切り拓き、暴力的主権に下支えされた西洋近代の負の遺産である人間中心主義を克服する道も見えてくるのではなからうか。

（土佐弘之「動物化を昂進するグローバル内戦」〔『現代思想』二〇一六年一月臨時増刊号〕による）

注 セキュリティイゼーション（安全保障化）……ある事象が脅威であり、対処が必要だとすること。 フレーミング……ものの考え方の枠組み。 トレードオフ……両者が両立しえない関係。 南北関係……経済格差の問題などが生じている発展途上国と先進国との関係。 B面……アナログレコードの裏面。両面に録音できる記録メディアの表面をA面、裏面をB面と呼称した。 レジーム……政権・体制。

〔問一〕 傍線(1)(2)(7)(9)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 空欄(3)に入れるのにもっとも適当な三字の言葉を、引用部以外の本文中から探し出して答えなさい。(句読点、かっこ等の記述記号も字数に数える)

〔問三〕 傍線(4)「まず過剰な安全保障国家化という問題を引き起こした」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 難民・移民の自由を侵すことで、民主主義の基盤にある人権思想を危うくすることになった。
- B 法にふれる措置を強行することで、法治主義に基づく自国の制度を危険にさらすことになった。
- C 非民主主義的集団とも手を組むことで、民主主義の限界を自ら認める営為を拡大することになった。
- D 民主主義的手続きを経ず武力行使に踏み切ること、自国の政治制度に矛盾を生じさせることになった。
- E 宣戦布告もせずに予防的攻撃を行うことで、人権思想の根底にある人間中心主義を否定することになった。

〔問四〕

傍線(5)「それにもかかわらず、というよりは、それゆえにパリ襲撃事件は起きた」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 移民・難民を警戒する措置をとったにもかかわらず、それこそが相互に相手を動物化することにつながり、テロへの要因となった。

B 民主主義を犠牲にしてまで犯人を捜索したにもかかわらず、それこそが相互の人権を認めない行為へとつながり、テロの一因となった。

C 法治の原則を放棄してまで治安を優先したにもかかわらず、それこそが相互に主権的暴力へと走らせ、テロへとつながる空気を醸成した。

D 自由の放棄を強いてまで安全保障をはかったにもかかわらず、それこそが相互のルサンティマンと憎悪につながり、テロの遠因となった。

E 移民・難民の保護を政策課題としたにもかかわらず、それこそが受け入れ側の嫉妬と、移民・難民側の反発をも生み、テロの原因を作った。

〔問五〕 傍線(6)「グローバル内戦のB面として捉えることもできよう」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中

から選び、符号で答えなさい。

A グローバル内戦とは第一に政治的暴力の恣意的行使を意味し、難民・移民の封じ込めは、他者を人間扱いしない点で同じ世界観の露頭と考えられる。

B グローバル内戦とは第一に国家間戦争とは異なる暴力の無制限な拡大を意味し、難民・移民の封じ込めは、南北の経済格差が根底にある点で同根の現象と考えられる。

C グローバル内戦とは第一に国家対非国家主体の紛争が超領域的になった状態を意味し、難民・移民の封じ込めは、その紛争を領域内に封じ込めようとする点で同一事象の両面と考えられる。

D グローバル内戦とは第一に国境を跨ぐ形での泥沼化した紛争を意味し、難民・移民の封じ込めは、先進国側のセイフティ・ネットを維持できなくなる恐怖に起因する点で同一構造と考えられる。

E グローバル内戦とは第一に言語・宗教が異なるものへの国境を越えた政治的暴力を意味し、難民・移民の封じ込めは、彼ら被害者たちの恨みや怒りを抑圧しようとする点でつながっていると考えられる。

〔問六〕 傍線(8)「人間、人権、そして人道主義の名のもとに、他の人々を獣として扱うことで、その当人が非人間的で残酷な野

獣と化す」とあるが、これと同じ意味を表す二十五字以上、三十字以内の箇所を本文中から探し出し、最初と最後の五文字を答えなさい。(句読点、かっこ等の記述記号も字数に数える)

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 人間を家畜化して馴致^{じゅんち}しようとする権力の構造は、西洋近代の負の遺産である暴力的主権とは別の問題である。
- イ 人道主義の根底にある人間中心思想が他者への暴力の起源であることを理解し、それを乗り越えなくてはならない。
- ウ 西側諸国とシリアでなされる報道とでは、失われた命の重さに対する対称性が失われ、共に作爲的操作が存在する。
- エ 人々は弱さゆえに双方向的絆を必要とするため、絆の必要性に気付くことでレイシズムを乗り越えることができる。
- オ 暴力自体を否定する世界観は、地球という一つの生命体を保護、維持していく行動にもつながる可能性を有している。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

詩は何よりもことばの芸術である。同じくことばを扱っているが、散文とは異なる仕方のことばに対しては、散文は〈意味〉significationを伝えることを使命として、ことばを〈記号〉signeとして使用する。ことばは対象を指示する道具にすぎない。⁽¹⁾散文を用いることは、ことばを利用することである。ところが、詩人は道具としてのことばとは縁を切っている。ことばを利用することを拒絶した人間が、詩人なのである。

記号としてのことばは、事物に名をつけ、事物を指示する。ことばは記号以外の何ものでもない。名づけられ、あるいは指示される対象とは何の関係もない。四本足の利口な動物は〈へいぬ〉ということばで指示される。このことばはその動物のいかなる性質とも無関係である。

散文においては、ことばが事物や観念を正確に指示することが問題である。我々がものを知るのは他人のことばを通じてであるが、それを我々に伝えたひとつひとつのことばは、少しも思いだせないことがある。記号としてのことばはガラスのようなものである。室内をはっきりと見させはするが、それ自体は透明なのである。

だから、散文が目指しているものはことばの彼方^{かなた}であって、ことばそのものではない。対象自体に直行するのが散文なのだといってもいい。ことばはひとつの約束事であり、道具にすぎない。役目がすんでしまえばただちに忘れられてしまうわけなのだ。詩においては、事情はまったく別である。ことばは道具ではない。単なる記号でもない。世界を名づけることは詩人の仕事ではない。詩人はことばをひとつの事物と考える。

「記号の帝国は散文であり、詩は絵画や彫刻や音楽の側にある」(サルトル『文学とは何か』)。画家は色や形を事物と考えてその前に立ちどまるが、同じようにしてことばの前に立ちつくすのが詩人なのである。

詩そのものは、詩が書かれている白い紙や、紙の上の黒い文字から成り立っている。読まれる場合であれば、詩はいくつかの音声から成っている。この意味では、詩も依然としてひとつの現実の事物である。しかし、この詩にうたわれている世界は、こ

うした文字や音声と同じ性質のものではない。ことばが単に現実の字画や語音として知覚されるだけであれば、美的対象としての詩的世界は決して現われることはない。

詩にうたわれる美の世界は非現実であり、現実ではない。非現実を構成するのはイマージュimageであり、美の世界はこのイマージュによって生みだされた想像imaginationの世界である。現実の知覚対象が、そのまま美的世界を構成することはありえない。

詩人のことばは、決して意味を指示する記号ではない。絵画の画面に塗られた絵具そのものは、それ自体としては単なる物質（つまり、単なる事物）にすぎない。事態は詩においても同様である。詩のことばそのものも、それ自体としては単なる事物ではない。

が、それは詩人が抱いたイマージュを読者たちに喚起するためのひとつの事物（つまり、物質的なアナログン〔類比物〕）なのだ。詩人の一切の技巧は、現実を構成するための作業ではない。むしろ、非現実なる美の世界を現出させる操作なのである。そうして、芸術家の仕事は、非現実の世界を生起せしめるために、現実の事物をあれこれと構成することではない。さまざまのオブジェを扱う造形芸術のことでも考えていただいたらわかりやすいかもしれない。ところが、鑑賞者の仕事はこうして構成された現実の事物（線や音や絵具）を介して、美的なる非現実の対象を把握することである。

この対象が把握されるのは、知覚によってではない。想像によってである。知覚は現実を志向するものでしかない。現実が否定される場合にしか、想像は生起しない。美的な態度はつねに現実界を超越する。

²⁾ サルトルの絵画論を紹介しておこう。そのまま詩にもあてはまるはずである。絵を構成するのは、絵具で描かれた色や形である。この色や形も、詩のことばと同じく決して記号ではない。記号は何か別の対象を指示する。〈局長室〉という表札には、黒い太い線で文字が書かれている。我々はその文字を読んで理解する。それはその黒い線をもとにして、我々がみずからその筆跡のあとを追い、その意味を納得してゆくことである。

ひとたび理解すれば、これらの線自体はもはや重要ではない。我々はもうこれらの線を知覚しない。これらの線を介して、用

事のある局長室に導かれる。この部屋はこれらの線のところにあるのではない。が、これらの線のおかげで我々はその部屋の位置を確認する。(3)。

画家の扱う色や形はこうしたものではない。画家は何よりも、色や形そのものの性質に熱中する。もちろん、色や形はただ物でしかないのではない。それは必ず何らかの感覚的な〈意義〉sensを（つまり、快いとか、もの哀^{かな}しいとかいった感覚的意義を）もっている。逆にいえば、そうした感じがそのまま物となつて存在しているのが、色や形なのだといってもいい。こうしたいちばん素朴な色や形の性質に注目するのが、画家なのである。

画家にとっては、赤があり、円があり、それがすべてである。サルトルは、それ自体においてこうした仕方では存在しているものを「事物」chosesとよんでいる。画家にとっては、色も形も、花もコーヒー皿も、すべてが事物である。画家が色や形そのものの性質に執着し、これらを事物として扱うことは、それらを記号として使用しないことにはかならない。

もちろん、たとえば花を事物としてではなくて、記号として扱うことはつねに可能である。〈花ことば〉というものがある。白いバラに〈誠実〉を意味させるとすれば、この白いバラはもはやバラではない。我々は花を通り抜け、花の彼方に誠実という抽象的な徳目を見る。花そのものはすでに知覚されていない。花の甘い香りが問題となることはない。

が、これは画家の態度ではない。画家が画布の上に描くのは、事物としての色であり形である。画家はこれらによって、現実の対象ではなくて、想像の対象を創造するのだ。

（市倉宏祐『ハイデガーとサルトルと詩人たち』による）

注 サルトル……フランスの哲学者、小説家、劇作家（一九〇五―八〇）。 イマージュ……心像、イメージ。

〔問一〕 傍線(1)「散文を用いることは、ことばを利用することである」とあるが、筆者は散文で用いられることばをどのような

ものとして捉えているか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A それ自体としては単なる仲介物で、対象事物に備わった固有の性質を記号として忠実に再現しようとするもの。
- B 対象事物の外面的特徴を強調する記号としての属性が、事物の存在のしかたをありのままに言い当てるもの。
- C 意味内容を記号として正確に指示するだけの、対象事物の特性とは関係のない約束事によって成り立っているもの。
- D 実際には記号としての道具にすぎないが、対象事物の特質を名指すことによって事物に存在意義を与えるもの。
- E 対象事物とは直接的には無関係でありながら、記号の持っている響きや字画が隠された内実を生起するもの。

〔問二〕傍線(2)「サルトルの絵画論を紹介しておこう。そのまま詩にもあてはまるはずである」とあるが、筆者はサルトルの絵画論をふまえ詩をどのようなものと考えているか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ことばに本来備わっている意味伝達の働きを前面に押し出し、鑑賞者に現実の背後にある美的世界を認識させることができるように構成したものである。
- B ことばの記号的側面である現実世界を明示する知覚的性質を前面に押し出し、鑑賞者のイマジユを刺激することができるように構成したものである。
- C ことばの音声や文字の線といった記号的性格を前面に押し出し、それらを介して鑑賞者に非現実的な対象を把握させるように構成したものである。
- D ことばそのものが持つ感覚的意義を前面に押し出し、非現実的な美的世界を鑑賞者の想像力によって喚起させることができるように構成したものである。
- E ことばにおける現実世界の類比物としての機能を前面に押し出し、鑑賞者の知覚がイマジユの世界を認知することができるように構成したものである。

〔問三〕空欄(3)に入れるのにもっとも適当な文を左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 記号が我々に事物の本質を認識させるわけなのだ
- B 記号が我々を記号の彼方に送りとどけるわけなのだ
- C 記号が我々を根源的意味の世界にいざなうわけなのだ
- D 記号が我々に事物を直視させ事物に名を与えるわけなのだ
- E 記号が我々の知覚を事物の世界から解放するわけなのだ

〔問四〕 本文の趣旨と合致しているものとして、最も適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 詩と散文のことばの運用構造は異なるが、詩がことばを事物として用い、世界を新たに意味づけていく点においては、散文における記号として用いられたことばが現実に名前を付与していく用法と共通する。

B 色や形は画布の上に描かれてあるという点では単なる事物にすぎないが、画家がそれらを非現実の世界を類比し得る事物として扱う時、詩人におけることばと同様に想像の世界を表象する性質を帯びる。

C 〈局長室〉という表札の文字はそれ自体ではただの事物だが、その文字の色や形が何らかの概念を指示するならば、〈局長室〉ということばの記号的性質は絵画的な事物へと変容していくことになる。

D 詩人や画家はことばや絵具をそれ自体で自足している事物として用いるが、鑑賞者に非現実の対象を感覚的に認識させるという働きからすれば、散文のことばが道具として情報を伝達する在り方と同じである。

E 散文においてことばは外界を名付け指示する表現上の手段にとどまるが、詩人にとってことばは想像世界を読者に把握させる事物であり、対象を正確に再現する点で絵画における色や形と同等である。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

近頃、和歌の道⁽¹⁾、ことにもてなされしかば、内裏、仙洞、摂政家、いづれもとりどりに、そこをきはめさせ給へり。臣下あまた聞こえし中に、治部卿定家、宮内卿家隆とて、家の風絶ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なりしかば、この二人にはいづれも及ばざりけるに、ある時、摂政殿、宮内卿を召して、「⁽²⁾当時正しき歌よみ多く聞こゆる中に、いづれかすぐれ侍る。心に思はんやう、ありのままに」と御尋ねありければ、「いづれともわきがたく候」とばかり申して、思ふやうありげなるを、「いかにいかに」とあながちに問はせ給ひければ、ふところより畳紙を落として、⁽⁵⁾やがて出でにけり。御覽ぜられければ、⁽⁶⁾

明けば又秋のなかばも過ぎぬべしかたぶく月の惜しきのみかは

と書きたり。この歌は治部卿の歌なり。⁽⁷⁾かかる御尋ねあるべしとはいかでか知るべき。ただ、もとよりおもしろくおぼえて、書き付けて、持たれけるなめり。

その後、又治部卿を召して、さきのやうに尋ねらるるに、これも申しやりたるかたなくて、

かささぎのわたすやいづこ夕霜の雲井に白きみねのかけはし

と、たかやかながめて出でぬ。これは宮内卿の歌なりけり。⁽⁸⁾まめやかか上手の心は、されば一つなりけるにや。

(『今物語』による)

注 仙洞……院の御所。 畳紙……懐紙。 和歌を書くのに用いた。

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)(4)の口語訳として、もっとも適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(1) 「ことにもてなされしかば」

- | | | | |
|------------------|---------------|-----------------|-----------------|
| D | C | B | A |
| 最も扱いが難しく思われていたので | 特にもてはやされていたので | 比較的よい状態とされていたので | ことさらに軽く扱われていたので |

(2) 「当時」

- | | | | |
|----------------|---------|-----|----|
| D | C | B | A |
| 和歌の始まりから現在までの間 | ちょうどその時 | あの頃 | 現在 |

(3) 「わきがたく候」

- | | | | |
|-----------------|-------------|-------------|-------------|
| D | C | B | A |
| 引き分けにはできないと存じます | 熱中できないと存じます | 判断できないと存じます | 仲裁は難しいと存じます |

(4) 「あながちに」

- | | | | |
|-----|------|------|-----|
| D | C | B | A |
| 詳しく | 偉そうに | 執念深く | 強引に |

〔問二〕 傍線(5)「に」と同じ用法のものを左の傍線部の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 文屋康秀は、詞はたくみにて、そのさま身におはず。(古今和歌集)

B 堀河の太政大臣、身まかりにける時に、深草の山にをさめてけるのちによみける(古今和歌集)

C 五条にぞ少将の家あるにいきつきて見れば、いといみじうさわぎののしりて、門さしつ。(大和物語)

D 深き川を舟にて渡る。(更級日記)

E 御年二十三ばかりにてうせさせたまひにき。(大鏡)

〔問三〕 傍線(6)「明けば又秋のなかばも過ぎぬべしかたぶく月の惜しきのみかは」の解釈として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 明るくなってきたら、また秋の半ばが過ぎるまで逢えないだろう。待つ人のことを思いながら、西の空の月が傾くの
を惜しんでいるのだ。

B 一夜一夜明けるたびに秋が深まり、もう秋も半ばが過ぎ去ったに違いない。月日の経つ早さを思うと命が惜しく思
えるのではないだろうか。

C 今夜もあなたに逢えないまま、明るくなってしまった。秋の半ばを過ぎた夜は長いので、月が傾くを見ずに早く寝
てしまえばよかった。

D 今夜が明けたらまた夜まで待たなければならぬ。秋の半ば過ぎの月が西に傾く様子は美しいが、長くなった夜さ
えも短く感じさせるのだ。

E 十五夜である今夜が明ければ秋も半分は過ぎたことになる。今傾く満月だけが惜しいのではない。秋が過ぎ去って
まうことが惜しいのだ。

〔問四〕 傍線(7)「かかる御尋ねあるべしとはいかでか知るべき」の解釈として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で

答えなさい。

- A 摂政殿にお尋ねをすることがよいと知ったので、ぜひお尋ねしてみよう。
- B 正しく歌を詠む者はどこにいるかというお尋ねに答えてよかったのか、どうにかして知りたい。
- C 優れた歌人は誰だと思いかというお尋ねがあるだろうとは、予測できるはずもない。
- D 昔から今まで、歌人は数多くいるため、このようなお尋ねが当然だとはとても思えないのだ。
- E 正しい歌の詠み方について尋ねるにはこの方こそふさわしいと、何としても知らせなければならぬ。

〔問五〕 傍線(8)「まめやかかの上手の心は、されば一つなりけるにや」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符

号で答えなさい。

- A 真に和歌に優れた者であれば、誰であっても目指すところはただ一つになるのだ。
- B 歌の道を極めた人たちの気持ちは、優れた歌を尋ねられて同じ歌を答えたことに現れている。
- C 定家も家隆も、ともに優れた歌人であるからこそ互いの歌を秀歌として答えるという同じ行動をとったのだ。
- D 歌の道で有名だった定家と家隆は、本当に歌が上手になりたいという気持ちは一致していたのだ。
- E 家隆が質問にはっきり答えなかったのに対し、定家ははっきりと答えたが、二人とも和歌の名人には違いない。

